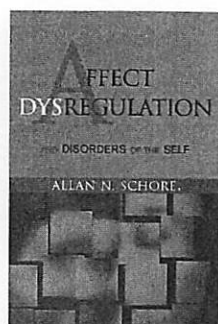


『情動調整障害と自己の障害』
『情動調整と自己の回復』 (二分冊一セット)



W.W.Norton, 2003.
\$80 (U.S.)

脳の世紀とも呼ばれる今世紀に入
って、精神医学の世界は脳科学の知
見を抜きに語ることはできないよう
な勢いである。ある精神障害になん
らかの脳障害が発見されると、まる
で精神障害の原因は解明され、脳障
害にあるかのように喧伝されやす
い。以前は心因性精神障害とされて
いた疾患でも、今では脳障害を基盤
にもつといわれているものも少なく
ない。

そのような中で、トラウマが脳に
深刻な障害をもたらすことは、今日
では常識となりつつある。本書はト
ラウマを初め多くの精神障害の共通
基盤に情動調整の障害を想定し、そ
れを支える脳基盤として右大脳皮質

の眼窩―前頭前野領域を重視しなが
ら、原因論から治療論に至るまで、
乳幼児精神医学、脳神経科学、発達
精神病理学、精神分析学などの学際
的知見を大胆に統合して論じた大部
の書である。第1部は原因論、第2
部は治療論として構成されている。

精神障害と脳障害について論じた
これまでの類書と異なる本書の特徴
は、第一に、脳と脳の関係、つまり
は脳を個別に取り上げるのではなく、
脳と脳の関係にまで踏み込んで
脳の働きを捉えようとしていること
である。心理学の領域において、人
間個別の存在に焦点を当てた心理学
(二者心理学) から、人間同士の関
係性に焦点を当てた心理学(二者心
理学)へと変遷しつつあるのと軌を
一にして、脳科学の領域でもそのよ
うな変化の兆しを感じさせるもので
ある。

第二に、著者が精神障害とりわけ
トラウマで深刻な障害がもたらされ

る脳部位として右脳(特に、視床―
大脳皮質前頭前野領域)を重視して
いることである。右脳の成熟はとり
わけ乳幼児期早期の三歳までの体験
に強く依存し、子どもと養育者間の
愛着関係の質によってその成熟過程
が左右されるという。したがって乳
幼児期早期に愛着関係がなんらかの
要因で阻害されると、その結果右脳
の成熟過程に深刻な障害が生じ、情
動調整障害がもたらされる。このこ
とが多様な精神障害の基盤として強
調されている。

本書は、精神障害の基盤として情
動の果たしている役割を真正面から
取り上げ論じていることによって、
非常に新鮮な印象を読者に与える。
これまで脳研究と臨床研究が本格的
に統合の方向で論じられることは少
なかったことを考えると、脳研究あ
るいは臨床研究のどちらに関心をも
つ者にとっても、なかなか刺激的な
書であることは間違いない。

しかし、われわれが肝に銘じてお
かなければならないのは、「心」と
「脳」の関係については(「心」はゆる
心脳問題である)、いまだほとんど
わかっていないということである。
たとえば、自閉症と脳障害との関連

についてこれまでの歴史を振り返っ
てみて驚かされるのは、その原因と
推定されてきた箇所は大脳の皮質に
始まり、今では皮質下に移りつつあ
ることである。ありとあらゆる脳の
局在が研究対象とされ、次々に原因
として注目される部位は変わってき
ている。それにもかかわらず、脳障
害を一義的とする考え方は、いまだ
非常に根強い。

心の病の原因あるいは治療法を探
るためには、あくまで臨床の場で
「いま、ここで」何が起こっている
かを徹底して把握することに努め、
それがなぜ生まれるのか、さらには
その発達のな意味は何かを究明して
いくという営みが求められる。その
ような営みが同時に行われてこそ、
脳研究の存在も大きな意味をもつに
ちがいない。なぜなら脳という開放
系の組織は、外界(環境)との不断
の交流を通して自己組織化を繰り返
すという、独特な性質をもつからで
ある。

(原書: Schore, A.N.: *Affect dysregulation and disorders of the self/Affect regulation and the repair of the self.*
W. W. Norton, New York, 2003.)

小林隆児